

春告草

第 32 号 平成 28 年 6 月 1 日 進路指導部発行

2016 年度大学入試を振り返る

1. 国立大は 5 年連続減少、公立大は 2 年ぶりの増加

2016 年度入試において国公立大志願者数は全日程合わせて 471,644 人で、昨年度より 2,902 人減少しました。募集定員は 101,157 人で単純に倍率を計算すれば 4.66 倍となります。これは昨年度の 4.67 倍とほぼ同じですが、1999 年度に国公立大学の入試方式が分離分割方式に統一されて以降、最も低い倍率となりました。

設置別に志願者数を見ていきます。国立大は、前期は 844 人の減少で昨年並みでしたが、後期は東大の後期廃止の影響が大きく 4,870 人の減少となり、国立大全日程では 5,714 人の減少となりました。

一方、公立大は前期で 166 人、後期で 1,591 人、中期では 1,055 人と全日程で志願者は増加し、公立大全体では 2,812 人の増加となりました。別日程で試験を実施している国際教養大、新潟県立大を除く公立大 82 大学のうち、志願者が増えたのは半数の 41 大学でしたが、文系のセンター平均点アップの影響で、人文科学系、社会科学系への志願者増が顕著となり、公立大全体の増加につながりました。

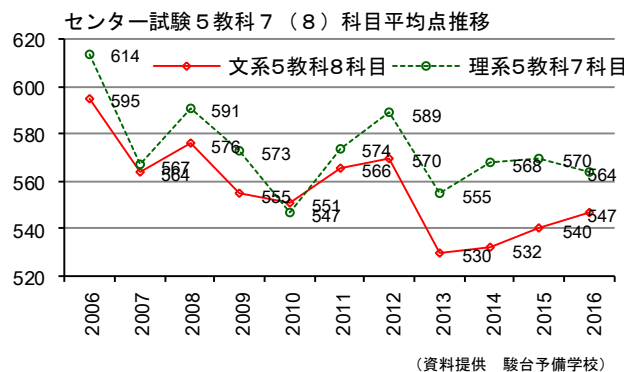
国立大志願者数減少の要因は以下の 2 点が考えられます。

① 「文低理高」の沈静化

前年度入試で見られた「文低理高」沈静化の傾向は、今年度入試ではさらに明確になり、文系の系統の人気回復が顕著でした。大学生の就職状況が好転したことに加え、理系の理科 2 科目負担の重さから、文理選択の段階で文系を選んだ受験生が多くなったことが要因と考えられます。また、国公立大の文理別の募集人数が文系より理系（メディカル系含む）の方が多いことも、全体の志願者数減少につながりました。

② 理系のセンター試験平均点のダウン

2016 年度センター試験の文系 5 教科 8 科目（900 点満点）、理系 5 教科 7 科目（900 点満点）の平均点（ベネッセ駿台集計）は文系が 547 点（得点率 60.8%）、理系が 564 点（62.7%）（データはベネッセ駿台）で、昨年に比べて文系は 7 点上がり 3 年連続でアップしましたが、理系は 6 点下がり 3 年ぶりのダウンとなりました。この結果、思ったほど得点できなかった理系受験生の中には国公立大への出願を断念した層が出たことも影響しました。

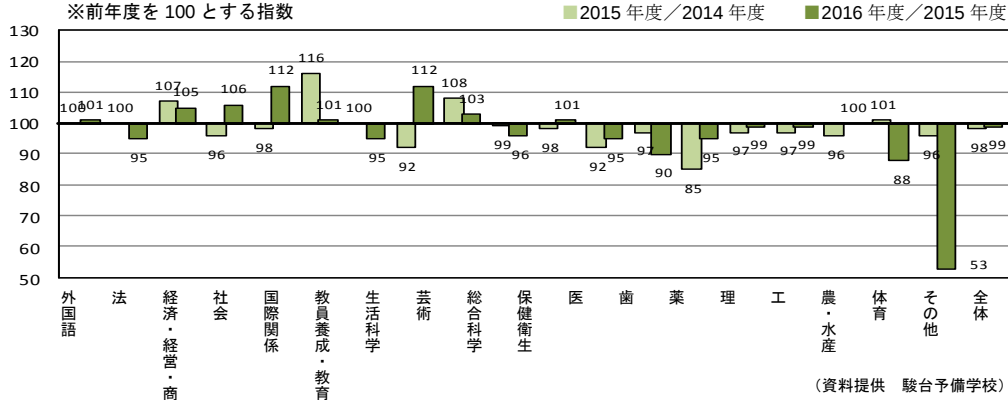


2. 系統別志願状況 文系の人気回復傾向が顕著

文理別では、文系の人気回復に対し、理系は前年度並みから減少の系統ばかりで「文低理高」傾向は完全に沈静化しました。

系統別にみると、文系では外国語（前年度指数 95 以下同じ）が神戸市立外国語大・外国語の大幅減少でやや影響が出たものの、その他の系統ではいずれも増加しました。特に、社会学（112）は大幅増加でした。経済・経営・商（106）、法（105）は 2 年連続で増加しました。国際関係（101）は昨年度の大幅増（116）の反動で微増に止まりましたが、依然として高い人気が続いていると言えます。

学部系統別志願状況



理系はメディカル系の減少が目立ちました。保健衛生 (101) は微増で前年度並でしたが、医 (95)、歯 (90)、薬 (95) はいずれも前年度から続けての減少でした。保健衛生は専攻別では、作業療法 (91) の減少が目立ちました。募集数、志願数ともに全系統の中で最も多い工 (99)、工に次ぐ理 (99) はいずれも微減ですが、前年度に引き続いての減少です。専攻別では、情報科学 (120)、化学 (114)、生物 (111) は大幅増でしたが、物理 (84) の大幅減少が顕著でした。文理いずれかの志願者のいる系統では、生活科学 (112) の増加は奈良女子大・生活環境 (149) の大幅増加や公立大での増加の影響です。教員養成系統 (95) は改組や募集停止、後期廃止による募集人員の減少がありましたが、ゼロ免課程を除けば昨年度並み (101) でした。その他 (53) の大幅減少は東大の後期廃止により、集計の対象が北海道大・総合入試のみになった為です。

3. 首都圏国公立大の志願状況

増加が目立った大学は、千葉大前期 +848 人、首都大後期 +452 人、電通大後期 +337 人。千葉大の増加は国際教養学部 (369 人 4.1 倍) の新設がありましたが、他学部も志願者が増加し、増加数は全国で最多でした。首都大の増加は前年度の大幅減少の反動とみられます。システムデザイン (64) 以外の 3 学部は増加。特に前年度ほぼ半減の都市教養 (178) は激増しました。電通大 (119) は後期募集人員増加に加えて、理系センター平均点ダウンにより、上位層の流入で大幅増加しました。

減少が目立った大学は、前期では横浜市大 -271 人、東京海洋大 -265 人、東京農工大 -235 人、埼玉県立大 -155 人。横浜市大 (89) は 2 年連続大幅減少。国際総合科学 (87) は 2 年連続の大幅減少。東京海洋大は大幅減少で 2 年連続減少 (89)。英語外部試験必須化 (経過措置有) の影響は大きいと思われます。農工大 (80) は 4 年連続の減少。理系のセンター平均点ダウンの影響が大きいとみられます。埼玉県立大は健康/健康行動 (143) は大幅減だが、他は減少した。

後期では、埼玉大 -525 人、東京農工大 -366 人、埼玉県立大 -168 人。埼玉大は教育学部の後期廃止の影響が大きく減少数は後期日程で全国 2 番目の多さでした。農工大 (84) は前年度大幅増加の反動による大幅減少とみられますが、前期の大幅減少による学内併願の減少も影響しました。埼玉県立大は募集単位ごとの増減がありましたが、減少した学科・専攻は減少の度合いが大きかったようです。

裏面に首都圏国公立大の志願状況を掲載しました。

4.2 段階選抜実施状況

2 段階選抜の第 1 段階選抜不合格者数は、前期 2,745 人で昨年に比べて 947 人 (74) 減少しました。前年度まで不合格者数が 5 年連続最多だった東京大学でも 6 科類中、文一、文二、理二の 3 科類で第 1 段階選抜が実施されず 560 人に止まり、161 人 (78) の大幅減少。この結果、前期では首都大学東京が最多の 612 人。後期では一橋大の 665 人が最多だが、首都大も 471 人と多い状況があります。

首都大足切り不合格者は前期で最多

2 段階選抜不合格者の多い上位 5 校

	前 期		後 期	
1	首都大学東京	612	一橋大	665
2	東京大	560	岐阜大	493
3	一橋大	189	首都大学東京	471
4	愛媛大	150	山梨大	303
5	京都大	142	福島県立医大	293
全体	2,745		4,079	

首都圏国公立大学志願状況概況

※学部名の後の（ ）は前年度指数 学科名は（ ）付で表示

大 学	日 程	志願者数増減		2016 年度		解 説
		増 減 数	指 数	募 集 員	志 願 者 数	
埼玉大	前	+305	110	979	3,381	教養(150)は前年度大幅減少の反動から大幅増加し、前年度の反動による増減が継続。経済(119)は大幅増加だが、方式別では一般枠(137)は大幅増加、(国際枠)64)は大幅減少と対照的。
	後	-525	83	413	2,564	大学全体では、教育の廃止の影響で、525 人(83)の 2 年連続大幅減少。経済(85) は 2 年連続大幅減少だが、他の 3 学部はいずれも前年度と逆の増減。教養(122)、理(83)が大幅に増減。
千葉大	前	+848	114	1,749	6,728	大学全体では前期は 848 人(114)の大幅増加。新設の国際教養を除いても 479 人(108)の増加。法政経(134)は募集増も影響して、6 年ぶりの増加。看護(157)も募集増だが、3 年連続減少の反動。園芸(125)は 2007 年の改組後最多。
	後	+364	109	396	4,629	前年度 6 年ぶりに減少した後期も 364 人(109)で再び増加。法政経(122)、工(109)、医(110)、薬(104)、園芸(117)が増加。
お茶の水女子大	前	+5	101	328	994	3 学部全てが前年度と逆の増減で、理(106)は 4 年連続減少の反動から増加。(数学)(93)を除いた 4 学科はいずれも大幅に増減。他の学部はいずれも微減だが、生活科学(98)は、学科別では 3 学科全てが大幅に増減。
	後	+1	100	53	611	生活科学(125)は、2 学科とも前年度大幅減少の反動で大幅増加。文教育(108) は、2 年連続増加。一方で、理(83)は、前年度大幅増加の反動で大幅減少し、前年度の反動による増減が継続。
電気通信大	前	-86	95	370	1,637	学科別募集から学域一括募集に変更の前期(95)は、募集人員減少の影響に加え、個別試験の理科が 1 科目から 2 科目に負担増となったこともあり 2 年連続減少したが、志願倍率は 4.2 倍→4.4 倍とわずかにアップ。
	後	+337	119	250	2,132	学科別募集から類型募集に変更の後期(119)は、募集人員増加の影響に加え、2 年連続減少の反動で大幅増加したが、志願倍率は 8.7 倍→ 8.5 倍とわずかにダウン。類型別ではⅡ類が 8.6 倍、Ⅰ類とⅢ類が 8.5 倍。
東京大	前	-166	98	2,960	9,278	大学全体では 166 人(98)の微減だが、文科類が 94 人(102)の微増、理科類が 260 人(95)の減少。文科類の 2 年連続増加に対し、理科類は 3 年ぶりの減少。第一段階選抜は文三、理一、理三で実施された。
	後	-145	94	594	2,154	言語文化(98)は 3 年連続増加の反動で減少したが、微減にとどまった。27 の募集区分のうち約半数の 14 区分で増加したが、前年度激増の東南アジア圏言語の募集区分がタイ語とカンボジア語を除き大幅減少。国際社会(87)は前年度の反動で減少。
東京外国語大	前	-225	91	109	2,192	後期募集は国際社会のみの実施。前期の影響もあるのかもしれないが、2 年ぶりの減少。
	後	-265	80	263	1,060	海洋科学(76)は、英語外部試験必須化(経過措置あり)の影響もあり大幅減少。学科別では、(海洋政策文化)(47)が 2 年連続増加の反動で激減、海洋工(91)は 2 年連続減少。学科別では、(流通情報工)(137)が前年度激減の反動で大幅増加。
東京海洋大	前	-92	91	113	922	海洋科学(88)は、英語外部試験必須化の影響もあり 2 年連続大幅減少。学科別では、(食品生産科学)(67)、(海洋生物資源)(75)が大幅減少。海洋工(98)は微減だが 3 年連続減少。3 学科全てが前年度の反動で大幅に増減。
	後	-38	98	721	1,805	大学全体では、38 人(98)の微減だが 5 年連続減少。課程別では、(初等)(106)は 3 年連続増加したが、前年度に改組した(教育)(80)の大幅減少が目立った。
東京学芸大	前	+109	110	163	1,252	大学全体では、109 人(110)と 5 年ぶりに増加。選修・専攻・コース別では、(教育／生涯学習)(251)、(初等／情報教育)(229)などが激増。前年度新設の(初等／環境教育)(47)は激減、(教育／多文化共生)(62)は大幅減少。
	後	+89	102	886	3,892	2 年連続の減少の反動から、89 人(102)の微増。2類(102)、4類(103)、5類(116)、6類(102)で増加したが、1類(96)、3類(94)、7類(91)は減少した。特に7類は、2010 年度以降低い志願倍率が継続している。
東京工業大	前	+26	105	35	509	東大後期募集の廃止により受験生の動向が気になったが、東大受験層からの目立った流入はなかった
	後	-235	86	529	1,488	工(84)は、個別試験の理科が 2 科目に負担増になった影響で、3 年連続減少。農(89)は、大幅減少で 5 年連続減少。5 学科全てが前年度と逆の増減。
東京農工大	前	-366	84	222	1,854	工(78)は、前年度大幅増加の反動で大幅減少。学科別では、増加したのは(生命工)(116)のみで、(電気電子工)(47)は激減。農(96)は微減だが、3 年ぶりの減少。学科別では、(応用生物科学)(106)が 3 年連続増加。
	後	-8	100	840	3,580	前年度の反動傾向が強く表れた。法(92)と経済(92)で減少し、商(106)と社会(108)で増加した。
一橋大	前	+59	104	80	1,432	法(83)は前年度指数 161 という激増の反動で大幅減少したが、志願倍率は 20 倍以上を維持。経済(108)は 2 年連続の増加。社会(114)は前年度の反動で増加した。東大後期廃止の影響が予想されたが、小幅な増加にとどまった。
	後	-194	97	1,034	5,435	健康福祉(121)は大幅増加で、学科別では、(作業療法)(49)は激減で、他の学科はいずれも大幅増加。システムデザイン(79)は大幅減少で 5 年ぶりの減少。都市環境(94)は 2 年連続減少。都市教養(100)は、微増で前年度並。
首都大学東京	前	+452	117	214	3,046	システムデザイン(64)は、大幅減少。他の学部はいずれも増加し、都市教養(178) は前年度ほぼ半減の反動で激増。都市環境(115)は大幅増加し、健康福祉(107)は 2 年連続増加。
	後	-220	93	935	2,801	経済(98)は微減だが 6 年連続減少。学科別では(経済)(131)が 4 年連続減少の反動で大幅増加、(国際経済)(78)は大幅減少で 2 年連続減少。理工(85)は学部改組後 5 年連続増加の反動で大幅減少だが、学科では(化学/バイオ)(179)が激増。
横浜国立大	前	-95	98	532	4,963	経済(98)、教育人間科学(84)、理工(94)で減少し、経営(117)で増加。理工では、(建築/海洋空間)(77)、(数物/物理工)(84)、(機械/機械)(88)で大幅減少。
	後	-271	89	575	2,214	国際総合科学(87)は、2 年連続大幅減少。学系別では、(国際／国際都市)(131) のみ大幅増加したが、他の 3 学系はいずれも 2 年連続大幅減少。医(看護)(83)は、前年度大幅増加の反動で大幅減少。
横浜市立大	前					

次世代を担う科学に強い関心のある高校生150名を募集

MOLECULAR FRONTIERS SYMPOSIUM 2016 が今秋、国内初の開催

今秋「MOLECULAR FRONTIERS SYMPOSIUM 2016」が開催され、現在シンポジウムへの参加者を募集している。

これは、MOLECULAR FRONTIERS FOUNDATION (MFF※) が行っている高校生年代の若者を対象とした国際シンポジウムで、国内での開催は初めてとなります。

今回のシンポジウムのテーマは、“Molecules and Our Healthy Life” (分子と健康的な生活)。ノーベル賞受賞者の Ada Yonath 先生、Y.T.Lee 先生、鈴木章先生、天野浩先生、野依良治先生を含め、世界各国から招請した著名な科学者が講演等を行います。

参加対象は高校生で、東京理科大学 (主催者) を会場に 10 月 9,10 日の 2 日間にわたって行なわれる。世界トップレベルの“科学 science”を体感し、将来、国際的に活躍する科学者を目指す若者の積極的な応募を受け付けています。開催概要は下記のとおりである。

※ MOLECULAR FRONTIERS FOUNDATION (MFF) は、スウェーデン王立科学アカデミー (Kungliga Vetenskapsakademien : KVA) によって運営される非営利団体。2006 年に世界の分子科学の認知向上を目的に設立され、毎年、私たちの日常や地球に関する様々なテーマに沿ってシンポジウムを開催している。今回のシンポジウムも、これまでストックホルム、ヨーテボリ、韓国、シンガポールなどで開催されてきた。

《概要》

日時: 10 月 9 日 (火)、10 日 (月)

会場: 東京理科大学神楽坂キャンパス (東京都新宿区神楽坂 1-3)

講演者・MF メンバー等 (敬称略)

- | | | | |
|-----------------|---|------------------------------|----------------------|
| ・ Ada Yonath | 2009 年ノーベル化学賞受賞 | ・ 鈴木 章 | 2010 年ノーベル化学賞受賞 |
| ・ 天野 浩 | 2014 年ノーベル物理学賞受賞 | ・ 野依 良治 | 2001 年ノーベル化学賞受賞 |
| ・ Y.T.Lee | 1986 年ノーベル化学賞受賞 | ・ 黒田 玲子 | MF2016 議長 / 東京理科大学教授 |
| ・ Bengt Norden | MFF 議長 | ・ 藤嶋 昭 | 東京理科大学学長 |
| ・ 大塚 巖 | 分子科学研究所前所長 | ・ 秋山 仁 | 東京理科大学教授 |
| ・ 高見澤 聡 | 横浜市立大学教授 | ・ Susan Lindquist | マサチューセッツ工科大学教授 |
| ・ 藤吉 好則 | 名古屋大学特任教授 | ・ Pernilla Wittung-Stafshede | チャルマース工科大学教授 |
| ・ Per Thoren | COO of Molecular Frontiers Foundation | | |
| ・ Asa Rensfeldt | Lead Organizer of Molecular Frontiers Inquiry Prize | | |

募集人数: 150 名 ※応募多数の場合は抽選

対象: 科学に強い関心を持ち、シンポジウムの内容を理解し、積極的にコミュニケーションできる英語力のある高校生

参加費: 無料 ※東京理科大学宿泊施設利用希望の場合、10 月 9 日の宿泊費用は無料

申込締切: 事前申込 2016 年 6 月 15 日 (水) / 書類提出 2016 年 7 月 1 日 (金) 必着

申込方法: 東京理科大学 HP より申込み <http://www.tus.ac.jp/molecular>

申し込み締め切り 6月15日



日本初開催!

牛乳の知的好奇心が、
開かれます。

MOLECULAR FRONTIERS SYMPOSIUM 2016 **参加者募集!**
10/9(日)~10/10(月・祝) 会場: 東京理科大学 神楽坂キャンパス (東京都新宿区神楽坂1-3)

対象: 次世代を担う科学に強い関心のある高校生 150名 **参加費: 無料**

※MOLECULAR FRONTIERS SYMPOSIUM 2016は、2006年に世界の分子科学の認知向上を目的に設立された、非営利団体である。毎年、私たちの日常や地球に関する様々なテーマに沿ってシンポジウムを開催している。今回のシンポジウムも、これまでストックホルム、ヨーテボリ、韓国、シンガポールなどで開催されてきた。

2016年6月15日(水) 事前申込 **2016年7月1日(金)必着**
申込方法: <http://www.tus.ac.jp/molecular/>
申込先: 東京理科大学MF2016シンポジウム準備事務局
TEL.03-5228-8726 (受付時間: 12:00~17:00)

MOLECULAR FRONTIERS SYMPOSIUM 2016
MOLECULAR FRONTIERS FOUNDATION (MFF) は、スウェーデン王立科学アカデミー (KVA) によって運営される非営利団体。2006年に世界の分子科学の認知向上を目的に設立され、毎年、私たちの日常や地球に関する様々なテーマに沿ってシンポジウムを開催している。今回のシンポジウムも、これまでストックホルム、ヨーテボリ、韓国、シンガポールなどで開催されてきた。

東京理科大学

プログラム

1 日目 10/9 (日)

■光と分光学

- 「光触媒とCO₂削減」
- 「LEDで地球を照らす」

■水

- 「脳は水でいっぱい」
- 「水ってどう変わるの?」

■科学技術と私たちの暮らし・環境

- 「私はどこから来たのか?」
- 「あなたはどこへ行くのか?」
- 「ダイナミックな化学反応と持続可能な人類の発展」



面白そうだから
申し込んでおこう。
中間試験前なので
早めに試験勉強
しないといけないな

2 日目 10/10 (月・祝)

■生命の分子

- 「微生物と人との関わり (医療・環境面)」
- 「病気と闘う 化学と『驚きの生物学』」
- 「生死に関わるタンパク質の立体構造」

■人に役立つ分子

- 「人類に役立つ科学の例 一有機ホウ素カップリング反応」
- 「『形状記憶』する金属のように振舞う有機化合物」

■パネルディスカッション

- 「分子化学の未来」